デート DV 第 1 次予防プログラムの開発と効果検証¹ ——高校生を対象として——

赤澤 淳子² 福山大学 井ノ崎 敦子 徳島大学 上野 淳子 四天王寺大学
下村 淳子 愛知学院大学 松並 知子 同志社大学

Development and evaluation of a primary prevention program on dating violence for high school students

Junko Akazawa (Fukuyama University), Atsuko Inosaki (Tokushima University),
Junko Ueno (Shitennoji University), Junko Shimomura (Aichi Gakuin University),
and Tomoko Matsunami (Doshisha University)

Since dating violence may occur among high school students in Japan, it is urgent to develop a dating violence prevention program for them. This study developed a 50-minute primary prevention program against dating violence for high school students to learn conflict resolution skills without violence. The program consisted of lectures on “assertiveness” to be honest with self-expression, “perspective-taking” to think from partner’s point of view, and views on dating violence. The treatment group comprised 79 students, along with 71 students as the control group. The effects of the program were evaluated by pre-, post-, and 5-month follow-up surveys. Significant effects of the program were shown for the improvement and long-term retention of the sense of violence and short-term improvement of assertive relationship formation. However, the program did not significantly affect assertive persuasion-negotiation and improvement in perspective-taking. It is expected that the positive effects of the program on the sense of violence will be shown to persist, and we intend to improve the program to promote the retention of improvements in long-term assertive relationship formation.

Key words: dating violence, primary prevention program, assertion, perspective taking, views of violence.

The Japanese Journal of Psychology

J-STAGE Advanced published date: July 31, 2021

日本では 2001 年に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」（以下、DV 防止法とする）が施行され、配偶者間の暴力（Domestic Violence: DV）が広く認識されるようになった。警察における DV の相談件数は、DV 防止法が施行された 2001 年は 3,608 件であったが、2018 年には 77,482 件であり約 21 倍となっている（内閣府、2019）。暴力は配偶者間だけでなく、婚姻関係にない恋人間においても生起し、そのような暴力はデート DV と呼ばれている（山口、2003）。

法律の制定や暴力の実態調査は、これまで私的な問

題として看過されてきた暴力が犯罪であり、大きな社会的問題であることを明らかにした。しかし、DV 防止法の適用対象は同居する恋人までであり、同居していない恋人間での暴力は適用外である。ところが、実際相手からの被害経験のある人は配偶者からの被害経験率も高いことが明らかになっており（内閣府、2018）、デート DV は DV の予備軍になっている可能性がある。

親密な二者関係で生じる暴力は、身体的な傷を負わせるだけでなく、時に生命を脅かし、深刻な精神的ダメージを生じさせることもある（小西、2004；上杉他、2013）。特に発達期である 10 代の若者にとって、恋愛関係で暴力にさらされることは、自己イメージや自己価値などに悪影響をもたらす（Jezl, Molitor, & Wright, 1996; O’Keeffe, Brockopp, & Chew, 1986）。今日、日本でも高校生のデート経験率は 50% を超えており（片瀬、2019）、この時期からデート DV が生起している可能性もあることから、高校生を対象としたデート

Correspondence concerning this article should be sent to: Junko Akazawa, Fukuyama University, Gakuen-cho, Fukuyama, Hiroshima 729-0292, Japan. (E-mail: jakazawa@fukuyama-u.ac.jp)

¹ 本論文は JSPS 科研費（基盤研究（C）課題番号 16K01805）の助成を受けた。

² 本研究にご協力いただいた高等学校の生徒の皆様、先生方に心よりお礼申し上げます。

DV 予防プログラムの実施は急務といえる。

これまで国内外で開発され、効果検証が行われたデート DV 予防プログラムの内容は、大まかに (a) 暴力や暴力的な関係に関する知識や態度に関する講義 (例えば, Avery-Leaf, Cascardi, O'Leary, & Cano, 1997), (b) 暴力的な関係性を低減させるようなスキルの獲得 (例えば, Hammond & Yung, 1991) に分けられる。1つのプログラムが1つの内容というわけではなく、両面を取り入れたプログラムもある。これらの中で葛藤解決スキルの習得を導入したプログラムがみられる。葛藤解決スキルとは、人が葛藤状態に陥った時や他者に腹が立った時にとる、暴力を用いない、葛藤解決に有効な建設的なコミュニケーションスキルである (Foshee et al., 1998)。例えば、お互いに納得するまで話し合ったり、異なる考えを持つ他者と交渉したりするなどのスキルである。自分の気持ちを相手に伝えるとともに、相手の話にも耳を傾けるなど自他を尊重した自己表現とされるアサーション (平木, 1993) もこれに含まれる。

Wolfe et al. (2003) は、14—16 歳の被虐待児 158 名を介入群と統制群に分け、暴力に関する講義と、葛藤解決スキルの獲得を目指した演習から成るプログラムを実施している。その結果、介入がプログラム参加者の交際相手に対する身体的暴力加害、交際相手から受ける精神的暴力被害、および暴力被害によるトラウマ症状の経時的な減少に効果的であることが明らかとなった。また、Wolfe, Crooks, Chiodo, & Jaffe (2009) は、14—15 歳の学生 1,722 名を対象として、21 の講義と演習から成る “The Fourth R” というデート DV 予防プログラムを実施している。その中に「葛藤と葛藤解決」というカリキュラムがあり、アサーションに関する内容や葛藤シナリオに基づいた授業が行われている。プログラム実施 2 年半後の効果検証では、介入群は統制群よりデート DV における身体的暴力加害が低下していた。このように、葛藤解決スキルを獲得することは、行動を変容させることに有効とされる。しかし、デート DV 予防プログラムの効果検証が進んでいる欧米においても、暴力で問題を解決することを防ぐためのスキルの獲得を目指したデート DV 予防プログラムの少なさと必要性が指摘されている (De La Rue, Polanin, Espelage, & Pigott, 2017)。

Straus (1979) は、全ての人間関係において葛藤は避けられないものであるため、葛藤を回避することより、むしろ葛藤の解決の仕方が重要であると指摘している。デート DV では、葛藤解決の方法が適切でない場合に暴力が生じたり、葛藤の解決に暴力が用いられることが問題であると考えられる (赤澤, 2015) ことから、葛藤解決スキルの獲得により暴力が抑制される可能性は高い。ところが、欧米よりデート DV 研究が 20 年ほど遅れている日本では (赤澤,

2019)、知識や態度の変容を目指したプログラムが多く、適切な葛藤解決スキルの獲得という視点を含めたプログラムは見当たらず、プログラムによる葛藤解決スキル獲得の効果を扱った研究も現時点では見当たらない (赤澤, 2015)。

そこで、本研究では葛藤解決スキルの獲得を目指したプログラムを作成し、その効果について検証することとした。その際、スキルの獲得を促す要因として視点取得の獲得もプログラムに導入することとした。視点取得とは、相手の立場に立って、相手の感情を理解する傾向であり、共感性の認知的側面とされる (Davis, 1983)。葛藤のある状況下であっても、視点取得が獲得されていると、他人への攻撃が抑制され (Feshbach, 1978)、望ましい葛藤解決スキルの 1 つであるアサーション態度の獲得にも効果が示される (安藤・新堂, 2013)。つまり、視点取得を高めること自体が暴力の抑制にも繋がる可能性があり、適切な葛藤解決スキルの選択にも効果を示す可能性がある。

視点取得とともに望ましい葛藤解決スキルを身につけるために必要なのは、その行為が暴力であるかどうかの認識である。暴力というのは極めて境界が曖昧であるため、自分にとっては暴力とは感じられなくても、他者にとっては暴力だと認識されることもあるということを理解しなくてはならない。つまり、主観的な暴力観だけでなく、他者の視点を含めた暴力観を有する必要がある。

暴力への認識を高めることと暴力の行使との間には強い関連性があることが示唆されている (Dibble & Straus, 1980) ことから、暴力に関する知識をプログラムに導入することの意義は大きいと考えられる。

ところで、カップル社会である欧米では早くから若者にもデート文化が浸透しており (Avery-Leaf et al., 1997)、デート DV に関する研究論文が 1970 年代頃よりみられる (赤澤, 2016)。また、1990 年頃から 10 代の中学生や高校生を対象として、デート DV の予防を目的とした第 1 次予防プログラムや、デート DV 経験者への介入を目的とした第 2 次予防プログラムが開発・実施され、効果検証も行われている (Cornelius & Resseguie, 2007)。

しかし、デート DV 研究が進んでいる欧米においてもデート DV 予防プログラムの効果を可能な限り客観性の高い方法で検証するという点において、いくつかの問題点が指摘されている。Cornelius & Resseguie (2007) は、(a) 多くの研究の自記式評価において、回答の歪みを検討するための「社会的望ましさ」尺度が考慮されていないこと、(b) 態度や行動の変容における明確なアセスメントがないこと、(c) プログラムの多くは効果検証研究においてフォローアップデータをとっていないこと、などを挙げている。また、De La Rue et al. (2017) は、倫理的な問題として、設定

した統制群に対してもプログラムを実施する等、デートDVに関する教育を施すことを挙げている。

以上の課題に加えて国内のデートDV予防プログラムには、効果検証自体が実施されていないという固有の課題がある。これまで高校や大学においてNPO法人等によるDVやデートDVについての予防プログラムが導入されてきたが、それらは実施のみか、事後に感想を書かせるまでに止まるなど、効果検証が実施されていないことが多い(野坂, 2010)。

以上のことから、本研究では、望ましい葛藤解決スキルの獲得、視点取得の獲得、および暴力観の向上を目指したデートDV第1次予防プログラムを開発し、その効果検証を行うことを目的とした。プログラム内容として、Wolfe et al. (2009)でも用いられていたように、葛藤解決場面を提示し、有効な葛藤解決スキルの指標としてアサーションを導入する。アサーション・トレーニングは心理教育的アプローチの1つで、夫婦関係における葛藤を未然に防いだり、解決したりするのに有効であるとされている(野末, 2008)。Rosenbaum & O'Leary (1981)は、攻撃的な夫は、そうでない夫に比べアサーティブではなかったと報告している。つまり、青年がアサーションを身につけることは、恋人との葛藤時にも暴力を用いず解決することに役立つと予測できる。また、適切な葛藤解決スキルの獲得を高めると考えられる視点取得や暴力観に関する講義や演習も行い、視点取得や暴力観におけるプログラムの効果についても検討する。

効果検証については先述した課題をふまえ、自記式を用いるため、効果の客観性を担保するために、回答の歪みを判別する社会的望ましき尺度を加えることとする。また、統制群を設定し、笹竹(2015)を参考として、統制群にも介入群と同じプログラムを受けられるような形態をとる。そして、事前・事後調査の変化だけでなく、フォローアップ調査を含め効果の維持について検討する。

以上のことをふまえ、本研究では、プログラムの開発に伴い、以下の仮説を検討した。

仮説1 プログラムの実施後、参加者のアサーションが高まり、フォローアップでも維持されるであろう。

仮説2 プログラムの実施後、参加者の視点取得が向上し、フォローアップでも維持されるであろう。

仮説3 プログラムの実施後、参加者の暴力観は向上し、フォローアップでも維持されるであろう。

方 法

参加者 地方都市にある普通科全日制公立高校3年生193名(男子84名、女子107名、不明2名)が2019年にプログラムに参加した。平均年齢は17.35歳($SD=0.67$)であった。3年生は6クラスあり、男女の比率や文系・理系の偏りができるだけ少なくなるよ

う3クラスずつの2群に分け、各々参加者1群(介入群)、参加者2群(統制群)とした。事前調査で、社会的望ましき得点(北村・鈴木, 1986)が18点以上だった23名は社会的望ましきによるバイアスが反映されているとみなし、分析対象から除外した³。

手続き 本プログラムは参加者1群、2群とも筆頭著者が担当して行った。効果検証のための調査は、参加者1群についてはプログラム実施前1週間以内に事前調査を、実施後に事後調査を各クラスで担任教諭が行った。参加者2群については、事前調査は参加者1群と同じ時期に実施し、事後調査はプログラムの実施前に行った(参加者2群にとってはプログラムの事後ではないが、1群に合わせてそう呼ぶことにする)。フォローアップ調査は参加者1群について5ヵ月後に行った(Figure 1)。

デートDV第1次予防プログラムの内容 本プログラムは、プレゼンテーションスライド(Table 1)を用いた講義と演習からなり、高校生の1回の授業時間に合わせて50分で行うようにした。プログラムの作成については実施する高等学校の養護教員の意見も聴取しながら作成した。プログラムの目的は次の2点にある。1つは、何を暴力と感じるかは人により、かつ、加害側と被害側の立場により異なることを理解することによって、共感性の認知的側面である「視点取得」の向上を図り、相手の視点に立った暴力観を育てることである(スライド10—14枚目)。もう1つは、「アサーション」を理解し、修得することである(スライド15—27枚目)。本プログラムでは、スライド24枚目以降にあげた葛藤場面として相手からの依頼の断り方について4—6人のスモールグループディスカッション(以下、SGDとする)を行い、その結果としてのアサーティブな断り方を生徒に2人1組のロールプレイで演じてもらった。アサーションについては恋愛に対する興味が無い、あるいは恋愛経験がない生徒にも興味を持ってプログラムに取り組めるよう、デートDVの場面だけでなく、日頃高校生が体験しやすい場

³ 北村・鈴木(1986)では、「はい」を0点、「いいえ」を1点で回答させた場合、得点の幅は1—10点となり、平均値から2標準偏差分を超える9点および10点を高度の社会的望ましきを示す領域としている。本研究では得点の幅が10—20点となることから18点以上の者の回答に社会的望ましきが反映していると判断した。

Figure 1. 本プログラムの手続き。

Table 1
デート DV 予防プログラムの講義内容

スライド枚数	内容
1. デート DV とは	
1 本日の学習目標	(1) デート DV の暴力とは？ (2) 暴力を防止するには？
2 夫婦間暴力 (DV)	夫婦何組に 1 組が DV を受けているかクイズ形式で説明
3 (1) DV の実態	被害経験の割合を示した図で実態について説明
4 (2) デート DV とは	デート DV の定義と、第三者や行政の介入が難しいことを説明
2. 暴力の種類	
5 (1) 身体的暴力	殴る、蹴る、つかむ、首を絞める、物を投げつける、等
6 (2) 性的暴力	嫌がっているのに身体に触る、性行為を断ると不機嫌になる、等
7 (3) 精神的暴力	服従させる、孤立させる、自尊心を低下させるなど、多様で認識されにくい、等
8 (4) 経済的暴力	おごらせる、働かせる・働かせない、お金を借りて返さない、等
9 (5) SNS を用いた暴力	リベンジボルノ、位置特定、異性の連絡先削除、メールの大量送付、等
3-1. 暴力を防止するには—他者の視点に気付く	
10 暴力の境界を考えよう (1)	軽度な加害例を 5 つ挙げ、それぞれ暴力と思うかどうか配布資料に○を付けて最後に発表し、暴力の認識が人によって違うことを知る
11 暴力の境界を考えよう (2)	(1) の 5 例を自分の大切な人が受けていたらどう思うかについて上記と同様に○を付け、視点が変わると暴力の認識が変わることを知る
12 暴力の見分け方	支配的関係性が生じる行為は暴力であり、相手がどう捉えているかが大事
13 暴力かどうかの判断は…	自分の大切な人が同じ行為を受けたらどう思うか、といった想像力・内省力による他者の視点取得が必要
14 周囲との関係を振り返る	周りに支配的関係性はないか、相手の暴力を容認・正当化していないか、自分の行為が暴力になっていないかを問いかける
3-2. 暴力を防止するにはアサーティブな自己表現	
15 アサーションとは	自分の気持ち、考え、信念などを正直に率直に、その場にふさわしい方法で表現し、かつ、相手が同じように発言することを奨励する態度のこと
16 断れなくて困った経験は？	断りにくい具体的な場面 1 を提示し、自分がその立場に立ったときに、どのような対応をするか考えさせる
17 あなたの対応は？	3 つの対応を提示し、自分が通常とる方法はどれに近いかを聞く
18 こんな時、どうする？	友人への難しい対応を迫られるような場面 2 を提示し、自分がその立場に立ったときに、どのように対応するか考えさせる
19 あなたの対応は？	3 つの対応を提示し、自分が通常とる方法はどれに近いかを聞く
20 3 種類の自己表現	自己表現は、いばりや (攻撃的)、おどおど (非主張的)、さわやか (アサーション) に分けられ、それらの考え方、言い方、相手の気持ち、自分の気持ちを表にして説明
21 あなたメッセージと私メッセージ	「あなたメッセージ」⇒相手のことを決めつけるような批判的な言い方、「私メッセージ」⇒共感的、受容的態度で自分の思い、意見として伝えること
22 あなたのパターンは？	先の例がそれぞれどの自己表現になるかを説明
23 さわやかさんの 3 つのステップ	1. 相手の気持ちに配慮しながら断る / 2. 断る理由を伝える / 3. 相手の立場を考え別の解決策があれば提案する
4. 上手な断り方を考えてみよう (次の 3 つの場面から 1 つを選び、断るセリフを 3 つのステップに沿ってグループで話し合う)	
24 場面 1	友人から、バイト代が入ったら返すからお金を貸してと頼まれた。
26 場面 2	付き合ってから 1 ヶ月の相手がキスしようとしてきた。あなたは相手のことは好きだがキスする気はなかった。
27 場面 3	土日は試験勉強する予定だったがバイト先店長からシフトに入って欲しいと頼まれた。

Table 2
アサーションの因子分析結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	F1	F2
F1：関係形成				
好きな人には率直に愛情や好意を示す	3.14	(0.97)	.771	.166
好意を持った相手には自分から話しかける	3.26	(1.00)	.708	.213
友達のいいところを見つけたら率直にほめる	3.66	(0.96)	.598	.322
少人数の話し合いの場で進んで意見を述べる	3.00	(1.03)	.562	.074
F2：説得交渉				
買った商品に欠陥があったら交換してもらう	3.69	(1.03)	.163	.675
貸していたお金を友達が返してくれない時は催促する	3.38	(1.00)	.168	.652
自分に分からないことがあれば、説明を求める	3.66	(0.83)	.386	.631
他人から誤解されたら、誤解が解けるように話をする	3.49	(0.91)	.159	.587
友達の都合を一方的に押しつけられた時は断る	3.62	(0.92)	.334	.476
大事な話の途中で口をはさまれたら、話が終わるまで待ってくれるように言う	3.12	(0.99)	.052	.354
	寄与率		2.17	2.02

面も加えた。プログラムの進行は第一著者が行った。

効果検証のための調査内容 各調査の調査票には、同一人物の回答であることが分かるように、コードネームとして4桁の数字、2つの平仮名の計6文字を記入してもらった。効果検証の調査票は、葛藤解決スキルとしてのアサーション、視点取得、暴力観、社会的望ましさから構成されている。アサーションは、玉瀬・越智・才能・石川（2001）による青年用アサーション尺度16項目を用い、「5: 必ずそうする」から「1: まったくそうしない」までの5件法で聞いた。本尺度は、人との良い関係形成に関わる「関係形成因子」8項目と、葛藤的な場面での説得や交渉に関わる「説得交渉因子」8項目から成る。視点取得は、葉山他（2008）の共感性プロセス尺度から認知的側面を測定する視点取得5項目を用い、「5: とてもあてはまる」から「1: 全くあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。暴力観の質問は、高校生では先述したようにデートの経験率が50%であり交際経験のない者も含まれること、重度の暴力の場合には社会的望ましさの歪みが生じやすいことから、重度の暴力表現は避け、(a) 身体的暴力として「けがをしない強さで叩く」、(b) 性的暴力として「いやがっているのに身体的接触を求める」、(c) 相手の自尊心を低下させる精神的暴力として「あなたを否定したり、意見を認めなかったりする」、(d) 相手を服従させる精神的暴力として「別れるなら自分は何をしでかすかわからないと言う」、(e) 相手を孤立させる精神的暴力として「交友関係や行動を見張るため相手のスマートフォンや携帯電話をチェックする」の5項目とした。それらの行為を交際相手に対して行った場合、暴力にあたるかどうかを7件法「7: 完全に暴力にあたる」、「6: 多くの場合暴力にあたる」、「5: 場合によっては暴力にあたる」、「4: どちらともい

えない」、「3: 場合によっては暴力にあたらない」、「2: 多くの場合暴力にあたらない」、「1: 全く暴力にあたらない」で回答を求めた。社会的望ましさは北村・鈴木（1986）の日本語版 Social Desirability Scale 10項目を用い、事前調査でのみ質問した。「1: はい」、「2: いいえ」で回答を求めた。

倫理的配慮 本プログラムは、高校の校長から承諾を得て授業の一環として実施した。生徒には担任教員からプログラム参加について事前に説明した上で、参加しない生徒に対して当該時間帯は他の学習をするなどの対応をしてもらうこととした（実際には、他の学習をする生徒はいなかった）。調査票のコードネームから個人が特定されることはないこと、回答は任意であること、回答しないことで不利益を受けることはないことを調査票表紙に表記し、実施時に口頭でも伝えてもらった。本プログラムは高校の養護教諭と連携して行い、実施中に嫌な経験を思い出して気分が悪くなる生徒がいることを想定し、「気分が悪くなった人は保健室で休んだり、途中で退席したりしてもよい」ことを事前に教員から伝えてもらい、当日の実施前にも口頭で伝えた。デートDVの被害者が含まれていることも勘案し、相談機関の情報について配付資料に連絡先やQRコードを記載した。本研究の倫理審査は福山大学学術研究倫理委員会にて受け、承認された（承認番号 H30-ヒト-5号）。

結 果

尺度の検討 尺度の検討については、欠損値がある生徒を除き事前調査・事後調査では150名、フォローアップ調査では75名を分析対象とした。

事前調査のアサーション16項目について主因子法バリマックス回転により因子分析した結果、2因子が

Table 3
デート DV 予防プログラムの事前・事後効果検証結果

		参加者 1 群 (N = 79)		参加者 2 群 (N = 71)		F 値		
		事前	事後	事前	事後	参加者	時期	交互作用
アサーション								
関係形成	M	12.47	12.97	13.47	13.20	1.59	0.65	6.83*
	SD	(3.48)	(3.26)	(2.78)	(2.75)			
説得交渉	M	21.15	20.92	20.82	20.79	0.16	0.29	0.18
	SD	(3.97)	(4.22)	(3.77)	(3.50)			
視点取得	M	17.46	17.49	18.08	18.17	0.89	0.13	0.02
	SD	(4.53)	(5.05)	(3.83)	(3.81)			
暴力観	M	24.51	27.33	24.42	25.02	1.54	21.78***	9.11**
	SD	(6.27)	(6.19)	(5.68)	(5.95)			

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

抽出された。しかし、Cronbach の信頼性係数は説得交渉が事前・事後調査でいずれも .500 以下であったため、2 因子で同程度の負荷量を示した項目や信頼性係数を低下させる項目を削除して再度因子分析を行い、4 項目と 6 項目の 2 因子を抽出した (Table 2)。それらの項目内容から、第 1、第 2 因子はそれぞれ玉瀬他 (2001) に倣い「関係形成」と「説得交渉」とした。Cronbach の信頼性係数は「関係形成」が事前調査 $\alpha = .785$ 、事後調査 $\alpha = .767$ 、フォローアップ調査 $\alpha = .642$ であった。「説得交渉」は事前調査 $\alpha = .757$ 、事後調査 $\alpha = .786$ 、フォローアップ調査 $\alpha = .610$ であった。以後、この因子を尺度項目とし、項目の合計点を各々「関係形成」、「説得交渉」とした。視点取得の 5 項目について主成分分析を行った結果、一次元性が確認された。Cronbach の信頼性係数は、事前調査 $\alpha = .912$ 、事後調査 $\alpha = .944$ 、フォローアップ調査 $\alpha = .929$ であった。以後、この 5 項目の合計点を視点取得とした。

暴力観 5 項目について主因子法プロマックス回転により因子分析を実施した結果、1 因子が抽出された。Cronbach の信頼性係数は、事前調査 $\alpha = .809$ 、事後調査 $\alpha = .890$ 、フォローアップ調査 $\alpha = .771$ であった。以後、この 5 項目の合計点を暴力観とした。

効果分析結果 本プログラム実施後の効果を検証するため、事前または事後調査で欠損値がある生徒 20 名を除く参加者 1 群 79 名 (男子 39 名、女子 40 名) と参加者 2 群 71 名 (男子 30 名、女子 41 名) を分析対象として、アサーション (関係形成・説得交渉)、視点取得、暴力観について 2 (1 群・2 群) $\times$ 2 (事前・事後) の 2 要因の分散分析を行った。その結果、アサーションは関係形成において交互作用が有意で ($F(1,148) = 6.83, p < .05, \eta^2 = .05$)、単純主効果の検定結果は、参加者 1 群は事前調査より事後調査において関係形成が有意に高かった。アサーションの説得交渉

と視点取得については、主効果も交互作用も有意ではなかった。暴力観においては、時期の主効果 ($F(1,148) = 21.78, p < .001, \eta^2 = .15$) と交互作用 ($F(1,148) = 9.11, p < .01, \eta^2 = .06$) が有意であった (Table 3)。単純主効果の検定結果は、参加者 1 群において事後調査が事前調査より、また、事後調査において参加者 1 群が参加者 2 群より有意に暴力への認識が高かった。以上の結果から、プログラムはアサーションの関係形成と暴力観において効果が示された。

プログラム実施 5 ヶ月後の効果を検証するため、フォローアップ調査を含む 3 回の調査を行った参加者 1 群 75 名の回答について 1 要因の分散分析を行った (Table 4)。その結果、関係形成では時期の主効果が有意傾向であったが ($F(2,148) = 2.72, p < .10, \eta^2 = .04$)、Bonferroni の多重比較では有意差は示されなかった。視点取得および説得交渉の主効果は有意ではなかった。暴力観では時期の主効果が有意であった ($F(2,148) = 13.42, p < .001, \eta^2 = .18$)。Bonferroni の多重比較では、事後 > フォローアップ > 事前の順に有意に暴力への認識が高かった。

考 察

本研究では、葛藤解決スキルとしてのアサーション、視点取得、および暴力観の変容を目指したデート DV 第 1 次プログラムを作成し、その効果と維持について検討した。

事前・事後・フォローアップ調査の効果検証結果を分析した結果、アサーションの関係形成については事後に有意に高まるが、5 ヶ月後の効果は有意ではなかった。また、葛藤的な場面での説得や交渉に関わる側面については全く効果が示されなかったことから仮説 1 は部分的にしか支持されなかった。アサーションのプログラムでは、葛藤場面において上手に断るといった説得交渉を高める内容であったが、説得交渉に効果

Table 4
参加者 1 群のデート DV 予防プログラムの効果検証結果

		事前調査	事後調査	フォロー アップ調査	F 値
アサーション					
関係形成	M	12.78	13.30	13.32	2.72 [†]
	SD	(3.15)	(2.85)	(2.44)	
説得交渉	M	21.19	21.29	20.89	0.73
	SD	(3.57)	(3.55)	(3.29)	
視点取得	M	17.91	17.99	18.36	1.17
	SD	(3.97)	(4.47)	(3.77)	
暴力観	M	24.68	27.82	26.22	13.42***
	SD	(5.83)	(6.16)	(4.43)	

[†] $p < .10$, *** $p < .001$

が示されず、SGD による話し合いが関係形成の事後評価に影響を及ぼした可能性がある。

海外のデート DV 予防プログラムをみると、少なくとも 10 回以上のプログラムを実施している場合には、知識の変化だけでなく、葛藤解決スキルの獲得や暴力加害低減の効果やその維持が示されている（例えば、Foshee et al., 1998）。その一方で、回数が 5 回以下の場合には、暴力やデート DV 等の知識獲得への効果はみられたが、身体的暴力への態度等には変化が示されていない（例えば、Macgowan, 1997）。つまり、プログラムの回数が少ない場合には、知識の獲得には効果があるが、アサーション等のスキルの獲得への効果は示されにくい可能性があると考えられる。今後は、少ない回数であっても効果がみられるための工夫として、Hammond & Yung (1991) が実施しているように、参加者の活動をビデオ撮影して振り返るなどのフィードバックや、上手にできた時の報酬を用いた授業内容を導入し、スキルの定着を図る必要がある。

次に、本プログラムは視点取得の向上についての効果は示されなかったことから、仮説 2 は支持されなかった。須賀・森田・斎藤 (2013) のプログラムは葛藤解決スキルの向上を目指したものではなかったが、効果検証として視点取得を導入し、事後調査において高まっていることが報告されている。彼らのプログラムでは、一度に参加する人数の上限は 40 人としていた。本プログラムでは、約 80 名と 2 倍の人数が一度に参加していたため、ロールプレイの発表も全員が行うことができず、十分なフィードバックが行えなかったことが、効果がみられなかったことの一因として考えられる。今後はより少人数のグループで実践して効果を検証する必要があると考えられる。

暴力観の変容については事後に有意な効果が示され、5 ヶ月後もその効果が維持されていることが明らかになり仮説 3 は支持された。50 分 1 回のみの講義

であっても、暴力の認識の変容は、プログラム後 5 ヶ月間は維持されることが示された。本プログラムでは、暴力の種類毎に具体的な例を挙げ、特に被害が目に見えるにくい精神的暴力については、多様な内容を取り上げ説明した。また、「他者の視点に気づく」というプログラムにおいて、その行為が暴力であるかどうかを判断するのは自分ではなく相手であることについて学んだ。また、その行為が暴力であるという認識が自身と他者と異なることをワークで実際に把握できた。これらの内容が、参加者の暴力への認識を高めた可能性がある。

以上のように、本研究で作成したデート DV 第 1 次予防プログラムは、暴力観の向上と維持に効果が、また、葛藤解決スキルとしてのアサーションの関係形成については短期間の効果が認められた。しかし、今回のプログラムでは、介入群と統制群が無作為に分類されたものではなかったため、本研究の効果については慎重に解釈する必要があるだろう。今後はプログラムの暴力観への効果について、中学生などより若い年代の対象を変えても同じ効果が示されるかという再現性の検討を重ねていく必要があると考えられる。

本プログラムでは、葛藤解決スキルの獲得を目指したが、十分な効果は認められなかった。スキルの獲得という行動面を変容させるためには、事前に認知面を変化させる必要がある（江角・庄司, 2016; 原田・渡辺, 2011）。今後は、本プログラム内の「上手な断り方を考えてみよう」の部分にロール・プレイングを導入し、指導者がフィードバックや得点化を実施するなど、参加者自身の認知面の変容を促す内容を導入すると効果的であろう。プログラム実施中に認知面を変容させることが、その後の行動面の変化の契機となり、プログラム後の自身の葛藤解決スキルの変容にも効果をもたらす可能性があると考えられる。

デート DV は性教育の中で取り上げられることもあ

るが、日本の学校での性教育はこの20年間以上停滞していると言われている(石川・土田・中澤, 2016)。これまで高校で実施されてきた性教育は性交や妊娠など生物学的な要素が大きく、講義形式で行われていることが多い。須賀(2015)が指摘するように、高校等の教員の9割弱はデートDV予防の授業を学校で行った方が良いと思っているにも関わらず、実際に導入されている学校は少ない。下村・赤澤・井ノ崎・上野・松並(2017)による高等学校の養護教諭を対象とした調査においても、デートDVを指導する上で感じている課題として、「デートDV指導に使える教材がない」が37.3%で最も多く、適切な教材が不足していることも明らかとなっている。今後、高校や大学の教材として導入できるような効果の高いデートDV予防プログラムの開発・改良が必要であると考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 赤澤 淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイトとしてのデートDV 発達心理学研究, 26, 288-299.
- 赤澤 淳子 (2016). 国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題 福山大学人間文化学部研究紀要, 16, 128-146.
- 赤澤 淳子 (2019). デートDV予防プログラムの現状と課題 人間学研究, 17, 1-10.
- 安藤 有美・新堂 研一 (2013). 非行少年における視点取得能力向上プログラムの介入効果——視点取得能力と自己表現スタイルの選好との関連——教育心理学研究, 61, 181-192.
- Avery-Leaf, S., Cascardi, M., O'Leary, K. D., & Cano, A. (1997). Efficacy of a dating violence prevention program attitudes justifying aggression. *Journal of Adolescent Health*, 21, 11-17.
- Cornelius, T. L., & Resseguie, N. (2007). Primary and secondary prevention programs for dating violence: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 12, 364-375.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- De La Rue, L., Polanin, J. R., Espelage, D. L., & Pigott, T. D. (2017). A meta-analysis of school-based interventions aimed to prevent or reduce violence in teen dating relationships. *Review of Educational Research*, 87, 7-34. <https://doi.org/10.3102/0034654316632061>
- Dibble, U., & Straus, M. A. (1980). Some social structure determinants of inconsistency between attitudes and behavior: The case of family violence. *Journal of Marriage and the Family*, 42, 71-80.
- 江角 周子・庄司 一子 (2016). 中学生における聴くことの学びを通した聴く行動の変容プロセスの検討 教育心理学研究, 64, 268-280.
- Feshbach, N. D. (1978). Studies of empathic behavior in children. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research* (Vol.8, pp.1-47). New York: Academic Press.
- Foshee, V. A., Bauman, K. E., Arriaga, X. B., Helms, R. W., Koch, G. G., & Linder, G. F. (1998). An evaluation of safe dates, an adolescent dating violence prevention program. *American Journal of Public Health*, 88, 45-50.
- Hammond, W. R., & Yung, B. R. (1991). Preventing violence in at-risk African-American youth. *Journal of Health Care for Poor Underserved*, 2, 359-372.
- 原田 恵美子・渡辺 弥生 (2011). 高校生を対象とする感情の認知に焦点をあてたソーシャルスキルトレーニングの効果 カウンセリング研究, 44, 81-91.
- 葉山 大地・植村 みゆき・萩原 俊彦・大内 晶子・及川 千都子・鈴木 高志・櫻井 茂男 (2008). 共感性プロセス尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, 36, 39-48.
- 平木 典子 (1993). アサーション・トレーニング——さわやかな「自己表現」のために—— 日本・精神技術研究所
- 石川 由香里・土田 陽子・中澤 智恵 (2016). ジェンダー規範の性行動に及ぼす影響と性教育の課題 活水論文集, 59, 19-35.
- Jezl, D. R., Molidor, C. H., & Wright, T. L. (1996). Physical, sexual, and psychological abuse in high school dating relationships: Prevalence rates and self-esteem issues. *Child and Adolescent Social Work Journal*, 13, 69-87.
- 片瀬 一男 (2019). 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要 日本性教育協会(編)「若者の性」白書——第8回青少年の行動全国調査報告——(pp. 9-28) 小学館
- 北村 俊則・鈴木 忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, 9, 173-180.
- 小西 聖子 (2004). ドメスティック・バイオレンス 白水社
- Macgowan, M. J. (1997). An evaluation of a dating violence prevention program for middle school students. *Violence and Victims*, 12, 223-235.
- 内閣府 (2018). 男女間における暴力に関する調査報告書(平成29年度調査) Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-aw/chousa/pdf/h29danjokan-5.pdf (2020年3月3日)
- 内閣府 (2019). 配偶者からの暴力に関するデータ Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/data/pdf/dv_data.pdf (2020年3月3日)
- 野坂 祐子 (2010). デートDVの被害・加害への介入支援 臨床精神医学, 39, 281-286.
- 野末 武義 (2008). 夫婦関係におけるアサーションの意味 平木 典子(編)アサーション・トレーニング

- ング——自分も相手も大切に自己表現——
(pp.149-160) 至文堂
- O'Keeffe, N. K., Brockopp, K., & Chew, E. (1986). Teen dating violence. *Social Work*, 9, 465-468.
- Rosenbaum, A., & O'Leary, K. D. (1981). Children: The unintended victims of marital violence. *American Journal of Orthopsychiatry*, 51, 692-699.
- 笹竹 英穂 (2015). 女子高校生を対象とした心理的デートDVの防止講座の効果検証 心理臨床学研究, 33, 441-450.
- 下村 淳子・赤澤 淳子・井ノ崎 敦子・上野 淳子・松並 知子 (2017). 養護教諭によるデートDV予防教育に関する研究 (1) ——高校生からの相談経験と保健教育との関連—— 日本健康相談活動学会第13回学術集会抄録集, 97.
- Straus, J. A. (1979). Measuring intrafamily conflict and violence: The conflict tactics (CT) scales. *Journal of Marriage and the Family*, 41, 75-88.
- 須賀 朋子 (2015). 中学生へのドメスティック・バイオレンス予防啓発に関する研究 風間書房
- 須賀 朋子・森田 展彰・斎藤 環 (2013). 中学生のためのDV予防教育プログラム開発と効果研究 思春期学, 31, 384-393.
- 玉瀬 耕治・越智 敏洋・才能 千景・石川 昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 50, 221-232.
- 上杉 有加・大島 麻美・背戸 美希・田根 なつみ・藤井 公美・鈴木 康江・前田 隆子 (2013). デートDVの実態調査——背景因子と健康への影響について—— 日本医学看護学教育学会誌, 22, 2-6.
- Wolfe, D. A., Crooks, C. C., Chiodo, D., & Jaffe, P. (2009). Child maltreatment, bullying, gender-based harassment, and adolescent dating violence: Making the connections. *Psychology of Women Quarterly*, 33, 21-24.
- Wolfe, D. A., Wekerle, C., Scott, K., Straaman, A. L., Grasley, C., & Reitzel-Jaffe, D. (2003). Dating violence prevention with at-risk youth: A controlled outcome evaluation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 71, 279-291.
- 山口 のり子 (2003). デートDV防止プログラム実施者向けワークブック——相手を尊重する関係をつくるために—— 梨の木舎
- 2020. 4. 21 受稿, 2021. 3. 20 受理 ——